

諸行無常 — 墓じまいの石はどこか寂しい —

かつてビートルズがヒットしていた時代、石屋さんは皆黒塗りの高級車に乗っていた。昭和の高度経済成長の頃である。

時代の波にうまく乗れた家庭はお墓を新調し始めていた。それまでの地元の溶結凝灰岩からピカピカに磨き上げられた御影石製の墓石に変わった。

鹿児島市谷山の二号用地には石材団地まで登場し、バブルがはじけるまでは石材業界は華やかだった。

しかし、好景気は長く続くはずもなく、石屋の看板は次々に外されて現在に至っている。

そして、人口減少の波はお墓を守る人までも消していったように思える。

立派な納骨堂も墓じまいされて、その石材は石屋さんの工場の片隅に建立者の名前だけ削り消されて転がっているのだ。たとえば、高価なインド産の黒や赤の御影石製墓石であろうと関係なく、新興住宅地の谷にうち捨てられ、埋め立てられて便利な土地に生まれ変わろうとしているようだ。

そして、時代は墓地ではなく、鉄筋コンクリートビル内のロッカー式、もしくはカード式スペースに骨壺は安置されて、まったく各家庭別の個性はなくなった。

この問題は他人ごとではなく、皆自分の事として考えなければいけない重大なことになってきた。

人口減少の事情は墓じまいにとどまらず、過疎化の進む地方の「土地じまい」という現象まで起きてきているようだ。都会に住む子孫は、誰も住まず利用することのない土地家に税金を支払うことが困難なのだ。

お釈迦様の言葉を代弁すれば、変わらぬものは何も無いという事なのだろう。

2023年6月



昭和はおろか、平成時代に建てられた墓石も墓じまいされているケースは少なくない。建立した人の気持ち、それを墓じまいした人の気持ちを考えると、そこにそれぞれのドラマを想像してしまう。